SURE 静岡大学学術リポジトリ
Shizuoka University REpository

旧制静岡高等学校関係資料の整理作業に関する経過報告(2012年度)

メタデータ	言語: Japanese
	出版者: 静岡大学人文社会科学部
	公開日: 2014-09-11
	キーワード (Ja):
	キーワード (En):
	作成者: 戸部, 健, 橋本, 誠一, 岩井, 淳
	メールアドレス:
	所属:
URL	https://doi.org/10.14945/00007906

旧制静岡高等学校関係資料の整理作業に関する経過報告（2012年度）

戸部　健・橋本誠一・岩井　淳

1．はじめに

静岡大学人文社会科学部大学アーカイヴズプロジェクトでは、静岡大学人文社会科学部所蔵の旧制静岡高等学校および静岡大学文理学部・人文学部関係資料の整理・公開に向けた作業に2009年度より取り組んでいる。これまでの活動内容については下記を参照されたい。

戸部健「旧制静岡高等学校関係資料の整理作業に関する経過報告」(『地域研究』創刊号、2010年)。

戸部健「旧制静岡高等学校関係資料の整理作業に関する経過報告（2010年度)」(『地域研究』第2号、2011年)。

戸部健・小二田誠二・岩井淳「旧制静岡高等学校関係資料の整理作業に関する経過報告(2011年度)」(『地域研究』第3号、2012年)。

今年度のプロジェクトでは、①旧制静岡高等学校関係資料の整理に着手、②資料の展示、③ガラス乾板の現像、④県外のアーカイヴズへの訪問、を主な目標とし、達成に向けて努力した。その具体的な動きについて以下で紹介する。

2．2012年度の活動

（1）旧制静岡高等学校関係資料の整理

人文社会科学部が所蔵している旧制静岡高等学校関係資料は、大きく①旧制静岡高等学校関係資料（人文社会科学部A棟215号室に配置）と②静岡大学文理学部・人文学部関係資料（同211号室に配置）とに大別できる。このうち②の整理作業については昨年度に終わったため、今年度より①の整理作業に入ることにした。まずは詳細な目録作りから始めたが、資料の量が膨大なため、今年度のうちに目録化できたのはそのうちの5分の1程度である。次年度以降も鋭意作業を進め、なるべく早く目録を完成させたい。

（2）資料の展示

昨年度に引き続き、今年度も人文社会科学部A棟玄関において資料の展示を行った。各展示のテーマと内容は以下のとおりである。

①「仰秀寮の歩み（1)」(昨年度からの継続)

展示期間：～2012年7月

展示内容：仰秀寮に関する資料（戸棚の落書き、食堂の食器、図書部が刊行した雑誌、寮歌の譜面、写真パネル）など

②「戦争と旧制静岡高等学校（1)」

展示期間：2012年8月～

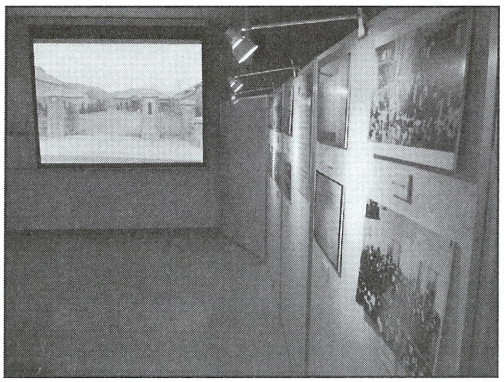
展示内容：昭和天皇行幸および軍事教練に関する文書資料（「教育勅語」、「昭和五年・一九年行幸台臨一件」、「昭和五年三月卒業教練考科表」）

今後の展示のテーマとしては、「仰秀寮の歩み（２）」、「戦争と旧制静岡高等学校（２）」、「旧制静岡高等学校の廃校と文理学部への移行」などを予定している。また、以上のスケジュールの合間に、卒業生関連の展示を行うことも検討中である。

なお、今年度は人文Ａ棟ロビーでの展示以外に、本学キャンパスニュージアムにおいて、2012 年 11 月 12 日から 22 日までの 11 日間、「写真でたどる旧制静岡高等学校のあゆみ」と題した企画展示を行なった。展示内容は、パネル展示とスライド映写の 2 つに大別できる。パネル展示の詳細は以下のとおり。１．はじめに・旧制静高関係年表、２．開校直後の旧制静岡高等学校、３．創立十年目の旧制静岡高等学校、４．仰秀寮の歴史（１）、５.旧制静岡高等学校関係資料の整理、６．おわりに。

企画展のポスター

このうち２～４はこれまで人文社会科学部Ａ棟玄関ロビーにおいて展示してきた内容とほぼ同じものである（ただし、セキュリティー上の理由から現物資料の展示は行わなかった。ゆえに、現物資料の一部を撮影したものをパネルにし、それに代えた）。これまでの展示を一挙に並べることで、それぞれの時代ごとに異なる学校の雰囲気を感じてもらうことを意図した。一方、５は旧制静岡高等学校関係資料の整理作業について紹介したものである。


企画展の様子

本企画展では以上のようなパネル展示のほかに、プロジェクターを使用したスライドの映写も行った。スライドの内容は旧制静岡高等学校に関する写真だが、これらはみな人文社会科学部資料室が所蔵する旧制静高関連のガラス乾板の一部を簡易的に現像したものである。写真の多くは 1934 年から 40 年頃に撮られたもので、学園祭、寮生活（ストームなど）、修学旅行の風景を写したものが主となっている（全部で約 120 枚）。また、映写にあたっては、雰囲気を出すために歴代の寮歌を BGM として流した。こうした工夫によって、往事の静高生の生き生きとした姿を、参観者に感じてもらうことができたのではないかと考えている。

ちなみに、企画展の来場者数は 11 日間で 240 人であった。

（３）ガラス乾板の現像

（２）でも言及したように、人文社会科学部資料室には在りし日の旧制静高の様子を写したガラス乾板が多数保管されている。キャンパスミュージアムでの企画展示にあたり、その一部を簡易的に現像し、放映したことはすでに述べた。ただ、あくまでも簡易的な方法（ライトボックス上にガラス乾

板を置きそれをデジタルカメラで撮影、その後画像データをトリミングした上でネガポジ反転）による現像であったため、それらは画質の面で必ずしも十分とは言えないものであった。そこで、静岡市内の写真業者に現像を委託することにした。量が多く、かつ１枚現像するごとにかかるコストも小さくないため、今年度のみですべてのガラス乾板の現像を終えることはできなかった。次年度以降に引き続き残りのガラス乾板を現像していく予定である。なお、ガラス乾板の現像作業は、主に篠原和大が担当している。

（４）県外のアーカイヴズへの訪問

昨年度は、旧制高等学校関係の資料の整理情況について見るために金沢市の石川四高記念館、松本市の旧制高等学校記念館、仙台市の東北大学史料館などを視察したが、今年度も同様の目的から湯之上隆と戸部が小樽商科大学史料展示室、北海道大学大学総合博物館などを、岩井淳が鹿児島県歴史資料センター黎明館、鹿児島大学附属図書館大学歴史展示室などを訪問した。各施設での調査の詳細については、巻末の附録を参照していただきたい。なお、出張時期の関係で、昨年度の報告に載せられなかった松本および仙台での視察の内容についても、合わせて掲載しておいた。

３．今後の課題

今年度の成果を踏まえて、来年度取り組むべきは以下の３点である。

（１）旧制静岡高等学校関係資料の整理

次年度も引き続き旧制静岡高等学校関係資料の整理に取り組む。資料の量が膨大だが、まずは詳細な目録だけでもなるべく早く完成できるよう努力していきたい。それが終わり次第、各簿冊に劣化防止の措置を施し、整理番号を添付する。また、スキャニングする必要がある資料についても適宜選定し、電子化を進める。

（２）ガラス乾板の現像

今年度現像できたガラス乾板は、保存されているガラス乾板全体からすればほんの一部である。次年度も予算の許す限り多くのガラス乾板を現像していきたい。また、現像した写真については、将来の公開に向けた整理を適宜行なっていく。

現像した写真の一部

（３）展示の入れ替え

スケジュールに基づいて、次年度以降も展示を続けていく。本年度キャンパスニュージアムで企画展を開催した際に、旧制静岡高等学校関係の展示に期待しているといった趣旨の言葉を市民の方からいくつかいただいた。そうした声にできるだけ応えられるよう努力していきたい。また、さらに多くの方々が旧制静岡高等学校の歴史に興味を持ってもらえるように、展示の仕方を工夫したい。

（戸部　健）

(付録)　各大学アーカイヴズ等調査報告資料

旧制松本高等学校校舎（本館、講堂）・旧制高等学校記念館
住　　所：長野県松本市県３－１－１
ウェブサイト：http://www.matsu-haku.com/maruhaku/guide/koutougakkou/
開館時間：午前９時～午後５時（入館は午後４時３０分まで）
休 館 日：月曜日（月曜日休日の場合はその翌日）、年末年始
入 館 料：大人（高校生以上）３００円（団体２００円）
　　小人（中学生以下）無料

JR 松本駅前バス停から松本市内を巡回するタウンスニーカーというバス(東コース)に乗車すると、バスは松本市時計博物館、松本市はかり資料館などの観光名所を経由して「旧松本高校」のバス停に到着する。そこで下車すると、目の前は広大な「あがたの森公園」である。目指す旧制松本高等学校校舎と旧制高等学校記念館はこの公園の中にある。

旧制松本高等学校は 1919 年に開校し、翌 20 年に本館（写真１）、1922 年に講堂（写真２）の竣工を見た。ヒマラヤスギに囲まれた校舎は、大正時代の典型的な洋風木造学校建築の特徴――明治時代のナンバースクールが中央入り左右対称形と異なり、隅入りコの字型となっている――を有するものとしていまも現存し、2007 年には国の重要文化財に指定された。本館はいまでも現役で「あがたの森図書館」などとして使用されているが、復元された校長室(写真３)、教室（約 66 ㎡）などは見学することができる。このほか講堂ホール（約 330 ㎡）も見学可能である。もちろん、校舎の内部に入らなくても、その周辺を散歩するだけで旧制高校時代の雰囲気を味わうことができる。歴史的建造物を保存することは、それによって構成される空間全体を歴史資料として保存することでもある。

これらの校舎に隣接して旧制高等学校記念館の建物（３階建て）がある（写真４）。同記念館は旧制松本高校の校舎内にあって、校舎とともに「あがたの森公園」の一角をなしている。同記念館は、もともと 1981 年に「旧制松本高等学校記念館」として開館し、松本高校時代の資料を展示する施設としてス

写真１

写真２

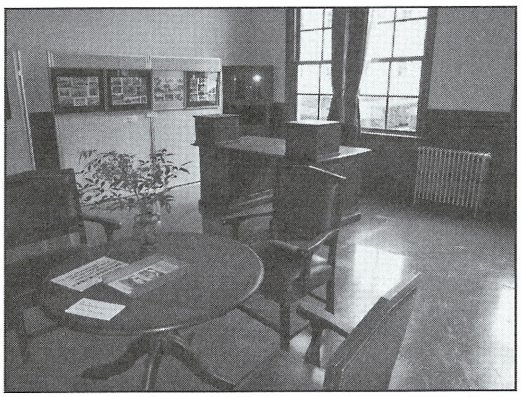


写真３

タートした。しかし、その後、学生寮「思誠寮」が1983年に取り壊されたことを契機に旧制松本高校関係資料を保存しようという気運が高まり、1993年に旧制松本高校関係資料だけでなく全国の旧制高校資料を収集・展示する施設として「旧制高等学校記念館」が新たにつくられ、現在に至っている。

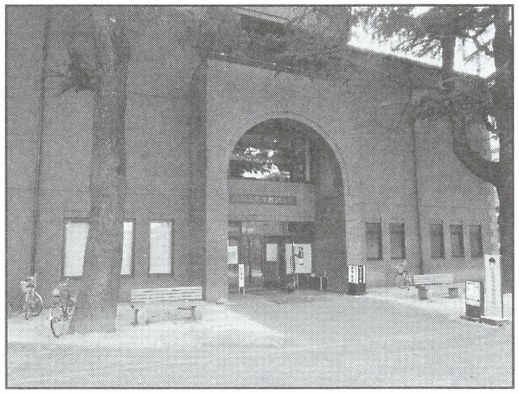


写真４

記念館の１階に受付と事務室があり、展示フロアは２階と３階にある。２階に上がって最初に目に飛び込んでくるのは、豪華な「全国高等学校陸上競技大会（フィールドの部）優勝旗」（弘前市立博物館貸与）である。優勝校の校章が刺繍されている。順路に従って進むと、まず全国の旧制高校に関する資料が展示されている。旧制高校の制度の概要を説明するパネル展示が中心であるが、当時の写真、書簡（浜口雄幸直筆の書簡もある！）、さらには貴重な現物資料などが多数展示されている。ただ、残念ながら、旧制静岡高校に関係する資料はほとんど展示されていなかった。わずかに「秋の大運動会宣言」と題する写真などがある程度であった。

２階ではさらに旧制松本高校の資料が展示されている。創立以来のさまざまな写真がテーマ別に展示され、それぞれに分かりやすい解説が付されている。「あがたの森かけ睦の月日＜創立＞」「青葉なすあがたの森の＜学びの窓＞」など、テーマの表記自体にセンスの良さを感じたが、展示内容自体もたいへん充実していて興味深かった。とりわけ「名物教師蛭川幸茂　通称蛭さん」のコーナーは、ただ一人の教師のために設けられた展示スペースで、いったいどんな人物かとつい興味をそそられてしまった。

写真５

各所に実物資料も多数展示されている。そのなかでもっとも重要なものは、学生寮「思誠寮」の展示であろう。展示スペースの一角に当時の寮生の部屋（思誠寮委員長室）が復元されている。ただ、惜しむらくは部屋がきれいすぎた（写真５）。実物はこれよりもっと汚かったはずだ（私の学生時代の経験から推して）。

３階では、梶井基次郎、井上靖、堀辰雄、川端康成、中野重治、檀一雄、三島由紀夫、武田泰淳、太宰治、近藤芳美など、そして松本高校出身の文学者（中島健蔵、北杜夫など）に関する資料が、旧制高校時代の文学者たちというコンセプトで展示されている。1983年に「思誠寮」が取り壊されたときに回収・保存された落書（寮の壁面に書かれたものなど）も展示されており、そのなかには北杜夫の落書（号は憂行）もあった。なお、このフロアには、静岡にゆかりのあるものとして、旧制静岡高校『眞寮日誌』（1942年）、『仰秀寮名簿』（1941年）が展示されていたことを付言しておきたい。

（追記）

見学当日の受付の方のお話では、展示内容は近々変更する予定ということであった。おそらく今ごろは展示内容も一新されているだろう。

（2012年２月18日調査、2013年１月11日記、橋本誠一）

東北大学史料館

住　　所：宮城県仙台市青葉区片平２丁目１－１　東北大学片平キャンパス

（現在補修工事中につき青葉区川内２７－１　東北大学川内キャンパス　東北大学附属図書館本館２号館内に一時移転）

ウェブサイト：http://www2.archives.tohoku.ac.jp/

開館時間：午前１０時～午後４時３０分(１２時～１３時は利用不可)

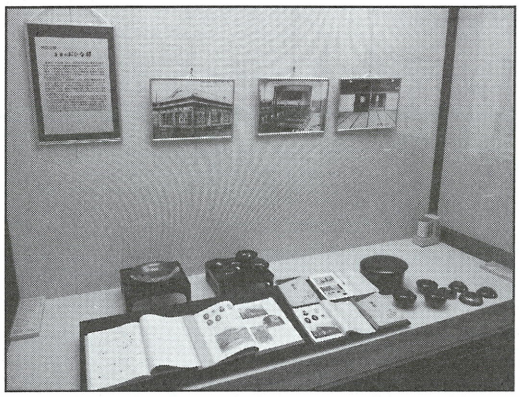
休 館 日：土曜日・日曜日・祝日・年末年始および附属図書館本館休館日

入 場 料：無料

東北大学史料館外観

東北大学史料館は、我が国最初の大学アーカイヴズとして、1963 年に東北大学記念資料室という名前で設置された。その後 2000 年に名称を東北大学史料館と変え、現在に至っている。史料館の建物は、東北帝国大学附属図書館として長らく使われてきたもの（1924 年竣工）を附属図書館の移転に合わせて改修したものである。ネオ・ルネッサンス様式のその格調高い建物は、それ自体が東北大学の歴史を感じさせる（ただし、現在は改修中）。

史料館に入ると、1 階左手に閲覧室と魯迅記念展示室がある。閲覧室には東北大学の主な学内刊行物や東北大学の歴史に関する参考文献約 10,000 冊、および 200 を超える数の国内大学の大学史および関連文献が開架されており、自由に閲覧できる。また、窓口係員への申請を通して特定歴史公文書や個人・関連団体資料を閲覧することができる。そのうち、一部写真資料については当館がウェブ上に開設した「東北大学関係写真データベース」（http://www2.archives.tohoku.ac.jp/etsuran.html）でも見ることができる。なお、閲覧室の一角では、大学資料の整理方法などについて紹介した展示、および星寮（大学病院勤務の看護婦や医学部附属看護婦養成所の学生のための合宿所）に関係する物質資料（食器やお雛様など）の展示がなされていた。



星寮関係資料の展示風景

魯迅記念展示室には、魯迅（本名周樹人、東北大学医学部の前身である仙台医学専門学校に留学）に関係する資料が多数展示されている（展示のタイトルは「魯迅と東北大学―歴史のなかの留学生―」）。陳列されたもののなかには魯迅の成績表や直筆のノート（藤野厳九郎教授の添削入り）などもあり、極めて興味深く感じられた。このような展示は、東北大学に通う学生、とりわけ中国人留学生の関心を呼び起こさせる上で有益であろう（ちなみに、片平キャンパスには仙台医学専門学校の講義室が「魯迅の階段教室」という名で保存されている）。

階段で 2 階に上がると、そこは常設展示室になっている。広いスペースのなかにたくさんの展示ケースが並んでおり、それらを一通り見ることで東北大学の歴史を、その前身校のものも含め、系統的

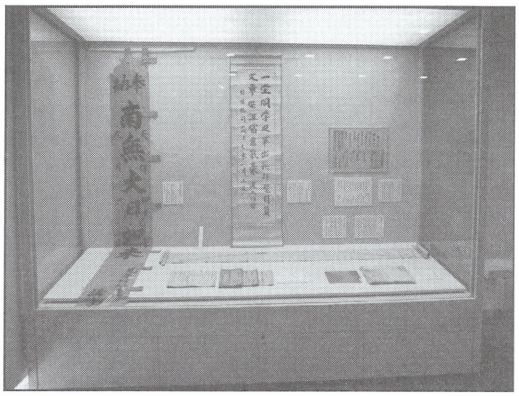
に学べるようになっている。

東北大学には史料館のほかに、東北大学総合学術博物館や西澤記念資料室などといった展示施設があるが、時間の都合上、今回は調査できなかった。

東日本大震災１年　資料レスキュー展

住　　所：仙台市青葉区川内２６番地　仙台市博物館１階ギャラリー
展示期間：２０１２年３月６日～２５日

2011年3月11日に発生した東日本大震災では、人命や建物だけでなく、古文書など歴史資料も甚大な被害を受けた。仙台市博物館はそれら歴史資料を保護するための活動に早くから取り組んでおり、その甲斐もあって少なからぬ歴史資料が消失の危機から救い出された。「東日本大震災 1 年　資料レスキュー展」は、仙台市博物館によるそうした活動について紹介したものである。



修復された資料

展示の流れは以下のようなものであった。①水損した古文書を再生させるための具体的な方法についての展示、②保護処理によって再生した古文書などの展示、③仙台平野で過去に発生した地震と津波およびその被害状況についての報告。

なかでも重点が置かれていたのは、資料の再生に関する展示であった。再生の手順についてレプリカやビデオなどを使って分かりやすく説明してあった。

予期せぬ自然災害から貴重な歴史資料をいかに守っていくか。この問題は南海トラフ地震を間近に控える我々にとっても他人事ではない。建物の倒壊や津波による資料の消失を避けるための手立て（安全な場所への資料の避難、重要資料のデジタル化など）を、旧制静岡高等学校関係資料においても早急に整えなければならない。なお、災害からの文化財保護については、すでに静岡県内でも様々な試みがなされているようである（NPO 文化財を守る会：http://bunkazaiwomamorukai.blog.fc2.com/など）。そのような動きとも連携していく必要があろう。

（2012年3月5～6日調査、戸部健）

小樽商科大学史料展示室

住　　所：小樽市緑３丁目５番２１号　小樽商科大学附属図書館３階
ウェブサイト：http://www.otaru-uc.ac.jp/htosyo1/annai/shiryotenji.html
開館時間：（平日）午前９時～午後５時　（休日）午前１０時～午後５時
休 館 日：附属図書館休館日
入 館 料：無料

小樽商科大学史料展示室は、小樽文学館で2001年に開催された「小樽高商、小樽商大90周年展」の際に収集された資料を学内で展示するために開設されたものである。当初は講義棟の空き教室を展

示室とし、かつ予約制での閲覧だったため利便性が低かったが、大学創立百周年を記念して 2011 年に附属図書館 3 階へ移転したことにより、格段に利用しやすくなった。移転にともない、展示スペースも拡充された。

展示内容は通史とテーマごとの展示とに分けられる。通史：1. 小樽高等商業学校の創立（1899～1921）、2. 充実する小樽高商（1922～1934）、3. 戦時下の小樽高商（1935～1945）、4. 小樽経専から小樽商大へ（1945～1949）、5. 新制小樽商科大学の基礎確立（1950～1960）、6. 高度経済成長期の小樽商大（1961～1990）、7. 改革のなかの小樽商大、21 世紀へ（1991～）。テーマ別：小樽高商と戦争、小林多喜二と伊藤整、外国人教師（戦前）、寮関係、古瀬大六文庫のご紹介。どれも興味深い展示ばかりであったが、とりわけ目を引いたのが小林多喜二・伊藤整・古瀬大六のような小樽商大の卒業生や教員に関するコーナーであった。自分が通う大学からどのような有名人が輩出されたかを知ることは、学生が母校の歴史に関心を持つ上で大きな契機となりうるだろう。ただし、どんなに偉大な人物であったとしても、その人物がすでに近年の学生にインパクトを与えなくなっているようでは、その人物を取り上げても十分な効果は生まれない。その点において当史料室のユニークなところは、現在も連載中の人気漫画（山下和美『天才柳沢教授の生活』講談社）の主人公のモデルである古瀬大六（元小樽商科大学教授）にスポットを当てているところである。このように、学生の興味を引くようなテーマをひとつでも組み込んでおけば、ほかの展示に対する学生の見方も変わるであろう。

小樽商科大学史料展示室全景

小林多喜二と伊藤整に関する展示

小樽商科大学の大学史関連の活動においてもう 1 つ着目すべきは、長年大学アーカイヴズの整理および公開において先進的な取り組みをしてきたところである。史料展示室の活動を中心的に担ってきた小樽商科大学百年史編纂室は、2000 年代初頭から大学が保有する公文書の整理および公開に向けた活動に取り組んできた。その成果の 1 つに百年史編纂室が管理するウェブサイト「緑丘アーカイブズ」（http://archives.ih.otaru-uc.ac.jp/html/exhibition.html）がある。当サイトでは、百年史編纂室が整理してきた大学史資料および公文書の目録を公開しているほか、一部資料を画像データのかたちで提供している。なお、旧制第五高等商業学校時代からの蓄積として、当大学には戦前期日本の植民地に関する資料が多く残されている。そうした資料の近代アジア史研究における有用性について議論するシンポジウムやワークショップが、すでに数回開催されていることも注目に値する。

北海道大学大学総合博物館

住　　所：北海道札幌市北区北１０条西８

ウェブサイト：http://www.museum.hokudai.ac.jp/

開館時間：午前９時３０分～午後４時３０分（夏期６／１～１０／３１）

（冬期１１／１～翌５／３１は午前１０時～午後４時）

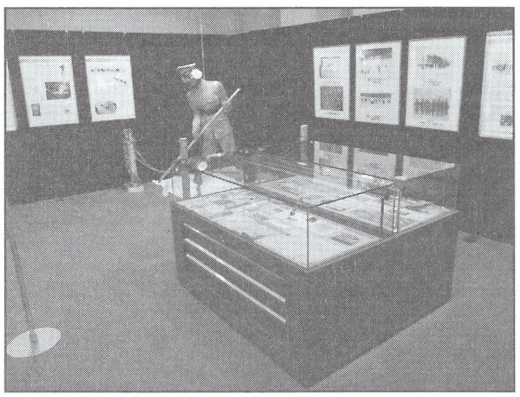
休 館 日：月曜日（月曜日が祝祭日の場合は開館、連休明けの平日が休館日となる）、年末年始

入 場 料：無料

北海道大学大学総合博物館外景

北海道大学における博物館施設の歴史は古く、すでに札幌農学校時代の 1877 年に、札幌仮博物館という施設が大学敷地の南方に設置されている（1884 年以前は開拓使が所管）。この博物館はその後名称を札幌農学校所属博物館、北海道大学農学部博物館と変え、現在に至っている。

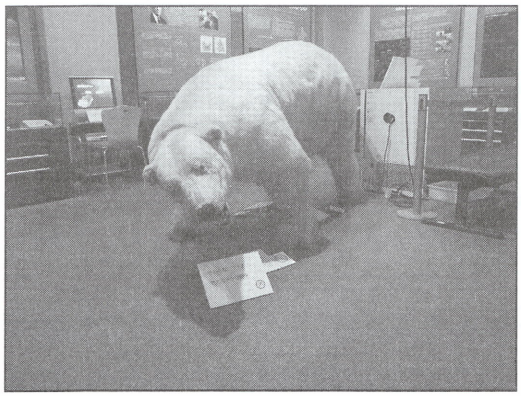
このたびの調査で我々が訪れたのは、それとは別に大学キャンパス内に設置された北海道大学大学総合博物館である。北海道大学の教育・研究の成果を広く一般に公開するとともに、貴重な学術標本を整理・保管し発信する場として、理学部本館建物を再利用して 2001 年にオープンした。地上 3 階、3,000 ㎡にも及ぶ広大なスペースに多種多様な展示スペースが並ぶ。各階の具体的な展示内容は以下のとおりである。



北大スキー部に関する展示

1 階：北大歴史展示、学術テーマ展示（北大との対話／通底する精神、リベラリズムからの出発、生き続ける札幌農学校精神、実学の精神、ロフティーアンビションの系譜、知の交流、知の蓄積、知の統合、生命―多様性と普遍性、循環から見る自然と人―森・土・水、北を見る目・北から見る目―変動する北東ユーラシア、人間・社会・自然と科学技術）

2 階：学術テーマ展示、ユニバーシティ・ラボ（サスティナブル・キャンパス、北大の蔵書、考古学ミュージアム・ラボ、海洋―海を科学する、グローバル COE 展示コーナー、宇宙―宇宙を科学する）



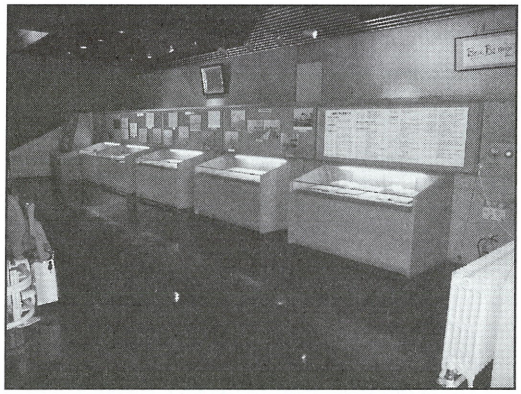
ホッキョクグマの剥製

3 階：学術資料展示、獣医学骨格標本、植物・昆虫標本、ムラージュ（ロウ製皮膚病模型）、アイランド・アーク、企画展示室

頻繁に展示の更新を行っているようで、例えば 1 階の「ロフティーアンビションの系譜」のセクションでは 2010 年にノーベル化学賞を授与された鈴木章名誉教授に関する展示が、また同階の「知の統合」セクションでは北大スキー部に関する企画展示がなされていた。それ

以外の展示も興味深いものばかりで、なかでも筆者の目を引いたのが 3 階の「アイランド・アーク」セクションに陳列されていたデスモスティルスという大型ほ乳類の骨格標本であった（全長 4 メートルはあろうか)。質・量ともにこれだけレベルの高い展示が無料で見られるというのだから、参観者が来ないわけがない。ポプラ並木、クラーク像と同様、大学総合博物館は、北海道大学を札幌有数の「観光地」にするために一役買っていると言うことができよう。それは、結果として大学の社会的なイメージの向上に繋がるはずである。

北海道大学の大学史関係施設としては、そのほかに①百年記念会館 2 階における大学史展示、および②附属図書館玄関棟 4 階の大学文書館がある。①では、比較的にこぢんまりとしたスペースに展示ケースを 9 台ほど並べ、札幌農学校以来の北海道大学の歴史を簡単に紹介している。展示内容は以下のとおり。北海道大学沿革略年表、札幌農学校の開校、札幌農学校の外国人教師たち、札幌農学校生の学業、東北帝国大学農科大学への昇格、北海道帝国大学の設置、戦争の影と北大、戦後の北海道大学。そのほか、展示スペース壁面に新渡戸稲造の書（「Boys, Be ambitious」）が掲げられている。



百年記念会館における展示の一部

②については、我々の調査日程が当館の開館日と折り合わず、残念ながら調査することができなかった。次回に期したい。なお、大学文書館について詳しくは以下のサイトを参照のこと。北海道大学大学文書館：http://www.hokudai.ac.jp/bunsyo/index.html。

（2012 年 12 月 8～10 日調査、戸部健）

第七高等学校関係調査報告

第七高等学校造士館は、1901 年 3 月に鹿児島市に開設された官立旧制高等学校である。簡単な歴史を記すと、第七高等学校造士館は、鶴丸(鹿児島)城の本丸跡地に設置された(写真参照)。1945 年 6 月、アメリカ軍による鹿児島大空襲によって校舎が全焼し、同年 11 月に鹿児島県出水郡高尾野町に一時移転したが、1947 年 9 月に旧校地に復帰した。その間に 1946 年 3 月、名称を第七高等学校と変更した。第七高等学校は、1949 年 5 月、新制鹿児島大学に包摂され、鹿児島大学第七高等学校と改称し、1950 年 3 月に廃校された。

校地は、鹿児島大学に包摂された後も、しばらく鶴丸城址に置かれた。鹿児島大学文理学部発足後も、その地にあったが、鹿児島大学が 1953～58 年に市内郡元地区に統合移転すると、鶴丸城址は同大学医学部の校地として 1957 年から 74 年まで使用された。郡元地

鶴丸城跡にあった
第七高等学校造士館跡の碑

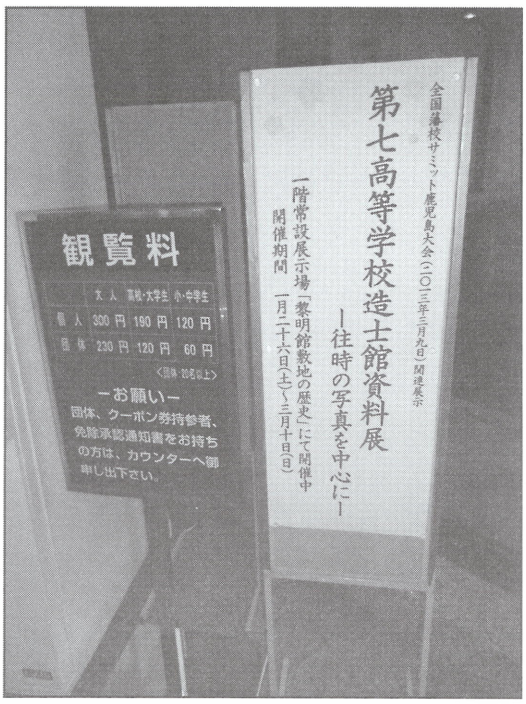
区は、現在郡元キャンパスとなって、医学部・歯学部・水産学部以外の鹿児島大学の各学部と大学本部など主要施設が存在している。七高校地があった鶴丸城址には、現在、鹿児島県歴史資料センター黎明館と県立図書館が建てられている。前者は1983年に、後者は1980年にそれぞれ開館した。

今回の第七高等学校調査は、2013年2月17～19日に行われた。18日と19日は、時折強い雨の降る雨模様であったが、静岡と比べても鹿児島は暖かく、過ごしやすかった。調査地は、かつて第七高等学校があった場所にある黎明館と、第七高等学校関係の資料を一部所蔵する鹿児島大学中央図書館・大学歴史展示室である。これ以外に鹿児島大学には、2004年5月に開館した総合研究博物館常設展示室が存在し、第七高等学校関係の資料を含む事務系文書・考古・教育機器資料などを展示しているが、すでに本誌(静岡大学『地域研究』2号、2011年3月)に戸部健による調査報告があり、重複するので、報告は省略した。

（1）鹿児島県歴史資料センター黎明館

住　　所：鹿児島市城山町７番２号
ウェブサイト：http://www.pref.kagoshima.jp/reimeikan/
開館時間：午前９時～午後６時(入館は午後５時３０分まで)
休 館 日：月曜日、毎月２５日、年末年始
入 場 料：３００円

歴史資料センター黎明館は、鹿児島大学医学部が桜ケ丘キャンパスに移転した後、1983年10月に鶴丸城の本丸跡地に開館した。設置にあたって、黎明館は「郷土の歴史・文化遺産に対する県民の理解と認識を深め、その文化活動および学術研究に寄与するための施設」と位置付けられている。黎明館は、人文系の総合博物館で、鹿児島の歴史・考古・民俗・美術・工芸を幅広く紹介している。現在は、１階で鹿児島の歴史を原始・古代、中世、近世、近現代と大きく四つに区分して展示し、２階では、南西諸島の海の民を含む鹿児島の民俗と幕末維新期を中心とした鹿児島の歴史を展示し、３階で美術品と工芸品を展示している。

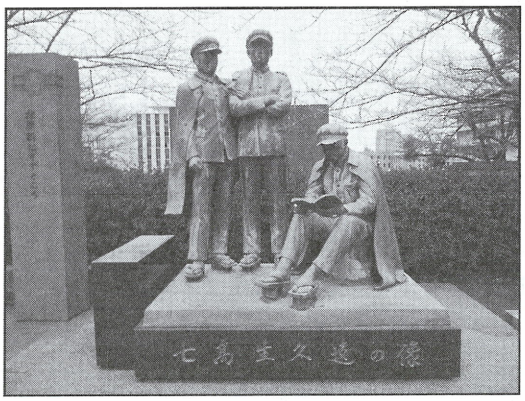


「第七高等学校造士館資料展」の掲示

その中で、１階の「近世のかごしま」の展示スペースの一部に、「黎明館敷地の歴史」というコーナーが設けられている。敷地の歴史は、1602年に島津家18代の島津家久によって鶴丸城が築かれたことに始まる。明治以降は、知政所、鎮西鎮台第二分営がおかれた後、1887年12月に鹿児島高等中学造士館が設置された。高等中学の初代校長には、旧薩摩藩主・島津忠義の弟・島津珍彦が就任した。高等中学造士館は、1901年に創立されることになる第七高等学校の前身である。筆者が訪れた2月17日には、「全国藩校サミット鹿児島大会(2013年3月9日)関連展示」として黎明館で、ちょうど「第七高等学校造士館資料展」(1月26日～3月10日)(写真参照)が開催されており、第七高等学校造士館関連の貴重な写真が多数展

示されていた。写真や展示物によって明治・大正・昭和初期と存続した第七高等学校の歴史を概観することができ、大変有益であった。

黎明館を見学した後、南側の敷地に出ると、ここに第七高等学校造士館が確かにあったことを伝える記念像と記念碑が存在していた。記念像は「七高生久遠の像」(写真参照)で、記念碑は「『北辰斜に』の碑」である。前者は、七高開校85年を記念して、七高同窓会によって1985年10月に建立されたものである。後者は、七高開校14年目にあたる1914(大正3)年に作られた記念祭歌「北辰斜に」を記憶にとどめるため、1990年10月に建てられた。



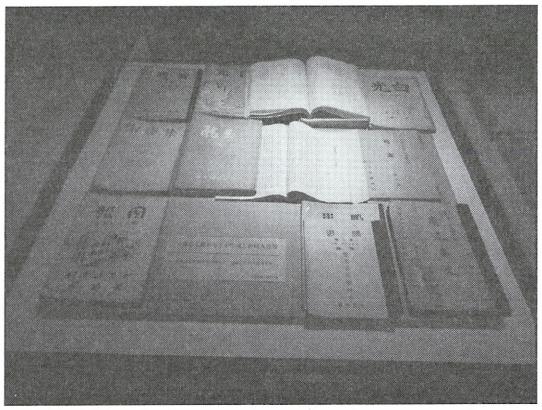
「七高生久遠の像」

（2）鹿児島大学中央図書館・大学歴史展示室

住　　所：鹿児島市郡元１丁目２１番３５号
ウェブサイト：http://www.lib.kagoshima-u.ac.jp/history/
開館時間：午前８時３０分～午後５時
休 館 日：春休み中と夏休み中の土日、年末年始
入 場 料：無料

中央図書館１階にある鹿児島大学歴史展示室は、2009年11月に鹿児島大学創立60周年記念事業の一環として開設された。鹿児島における高等教育の代表的流れは、島津家25代の島津重豪によって1773(安永２)年に創立された藩学「造士館」に始まる。その流れは1887年開設の鹿児島高等中学造士館、1901年開設の第七高等学校造士館へと継承され、1950年に鹿児島大学文理学部に受け継がれ、現在の法文学部と理学部に至っている。しかし、高等教育の流れは、それだけにとどまらず、江戸時代の医学院に起源をもつ現在の鹿児島大学医学部や、明治時代の高等農林学校に起源をもつ現在の鹿児島大学農学部などを加える必要がある。

大学歴史展示室では、鹿児島大学の前史と各部局の流れをパネルによって、視覚的に分かりやすく解説している。また「七高造士館の学生が作成した同人誌等」(写真参照)も展示されており、興味深かった。場所は、中央図書館の入口を入って左奥にあり、非常に目立っていて、外来者にもアクセスしやすか



「七高造士館の学生が作成した同人誌等」の展示

鹿児島大学歴史展示室

った(写真参照)。中央図書館自体が、共通教育棟や理学部、法文学部に囲まれ、道路を隔てて教育学部に接しており、郡元キャンパスの中心部に位置している。その意味で、大学全体が、鹿児島大学の歴史を重視し、尊重しているという印象を受けた。鹿児島大学歴史展示室の調査に当たっては、鹿児島大学法文学部の細川道久教授のお世話になり、様々な質問に対しても懇切丁寧に答えていただいた。記して感謝申し上げる次第である。

(2013年2月17～19日調査、2013年2月20日記、岩井　淳)